

経済と経営 29-4 (1999. 3)

〈論 文〉

分析的, 誘惑的 哲学することの危うさについて

三 上 勝 生

1 Hiroshima, mon amour

かつてミッシェル・セールは「私はなぜ哲学者 *philosophe* なのか」という問いに「ヒロシマの故に *à cause de Hiroshima*」と答えた。古代ギリシャ以来, 哲学から諸科学が分化発展した, その一帰結として国家は巨大な力すなわち「原爆」を持つまでになった。そういう時代に国家はもはや「哲学者」を必要としていない。裏を返せば, 今こそ人が自由に哲学することができる時代になったのだ。それが故に私 (セール) は哲学者になった, というわけだ<sup>(1)</sup>。

そのセールの回答を留保しつつ花田圭介はその同じ問いに「『ヒロシマ, わが愛』の故に」と答えた<sup>(2)</sup>。その場では, このある意味でスキャンダラスな回答をスキャンダルとして受け取った者はいなかったし, また, そのある意味で「危険な」回答を危惧する者もいなかったのは, 花田自身が被爆者である事実をすぐさま付け加えたからだったかもしれない。広島爆心地から二キロほど離れた場所で花田は被爆している。彼は「ヒロシマ」を体験している。

「ヒロシマ, わが愛」は, 『二十四時間の情事』という邦題で封切られた, マルグリット・デュラス脚本, アラン・レネ監督の日仏合作映画(1959)の原題“Hiroshima, mon amour”からとられた言葉である。広島を舞台にして,

「ヒロシマ」を見たか見ないかという、男女の会話が数回反復される象徴的な映画である。花田は「フィーリング」であることを断りながら、「ヒロシマ」体験にもかかわらず、そこに関わる「愛」が「哲学すること」の「動機」になっていると静かに語った。それを初めて聞いたときの私は「ヒロシマ」と「愛」を結びつける「道」が見えなかった。

その後、花田の書いたある論文<sup>(3)</sup>を読んだ。それは哲学研究者としてのキャリアを積みはじめた若い頃の論文で、「国家と哲学」の関係を「暴力」に照準を合わせて論じたものだった。花田はその論文のなかで、個人が理不尽な（理解を超えた、したがって経験の概念を超えた）暴力を被ったときに、心が「怖れ」の感情に支配されがちであることを警戒し、「怒り」をしっかりと立ち上げる知性の働かせ方について論じていた。それを読んだ私のなかで、「ヒロシマ（暴力）」と「愛」が「怒り」を媒介にして結びついた。そして花田にとって「ヒロシマ」と「愛」の間に横たわる闇を照らすことが「哲学（愛—知 philo-sophia）」なのだとして理解した。

もう少し分析的に次のように言い換えられるかもしれない。プラトン＝ソクラテスの名とともに始まる哲学の〈情報〉は紆余曲折しかつ複雑に分岐した複数の経路を辿って花田に到来する。そのなかのひとつの経路が「ヒロシマ」という出来事として多数の生命を奪うと同時に彼の生命を脅かすような結果を齎した。逆に言えば、「ヒロシマ」へと収斂した経路を逆行すれば、その一端に哲学の起源があるという哲学自身の来歴が見えてくる。それを隠蔽せずに、つまり「ヒロシマ」を結果するような歴史とは何なのかを「知ることを愛し」、かつ別の来歴の豊かさにも哲学を開いていくこと。私が見るかぎり、花田はそれを理論化＝実践していた。

以上の話しは、1980年代前半、私が哲学研究者としてのキャリアを歩み始めた頃、哲学科の大学院生時代のエピソードである。このような挿話をいきなり差し挿んだのは、ここ数年の私と私をめぐる状況の変化がそもそもこの私を哲学に駆り立てるものは何なのかという問いを私に突き付けているから

である。この自己言及的な問いを引き受けるか、罨として回避するか、道が分かれるところである。理想としては、一方で罨と知りつつ引き受けて、他方でなおかつその構造を内破させる戦略を練り上げ実践したいと思うが難しい。少し醒めて私的に答えておけば、私にとって哲学とは、様々な形態を纏って現象する〈力〉とプラトン＝ソクラテス以来の〈知〉との関係を隈なく走査することであり、とりわけある種の〈暴力〉が発動しだす現場に有効に介入しうる〈知〉を練り上げることである。また、この私を「哲学すること」に駆り立てているものはそのような「抵抗の方法」を組織したいという欲望である。しかしそうは言っても、そもそもそういう場所へ私を駆り立てるものは何なのかという問いは開かれたままである。

## 2 三つの出会い

ここ数年私は「コミュニケーション」をテーマに仕事をしてきた。そこで避けることのできない問題が集団、組織、システム等々と個人の問題の関係の問題だった。この問題に関しては一方で文献的に比較的多く触れてきた論理実証主義以降の英米の分析哲学やフレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインのライン、またラカン派の精神分析やいわゆる「フランス現代思想家たち」の仕事などから理論的かつ実践的な多くのヒントを得てきた<sup>(4)</sup>。しかし他方で最近得た三つの出会いがより貴重なヒントを私に与えてくれた。一つはある詩人の仕事とその詩人との出会い<sup>(5)</sup>。二つめは私が勤務する札幌大学でのある学生との出会い。そして三つめはある若手哲学研究者の「デリダ論」との出会い。

先述した「私と私をめぐる状況の変化」とはそれらの出会いによって引き起こされたものである。その変化は「幽霊は消えた」と表現されるべきものだった。偶然とは言い切れないが、それらの出会いを繋いでいたのも「幽霊」という隠喩だった。それは場面によって、「余剰」、「剰余」、「残余」、「過剰」、

「混乱」等々と言ひ換えられていったが、要するに現実が動くために、あるいは現実を動かしていくために必要なシステムから零れ落ちる「余り」のことだった。その「余り」をどう処理するか（実践）、またそもそもそれはどうして生じるのか（理論的認識）ということは、高度に思弁的な哲学や精神分析の理論構築の場面から世俗的な場面までをも貫く問題として私に突き付けられていた。

ラカンの精神分析理論と彼の政治的振舞、デリダの脱構築理論と彼の政治的振舞は私にとって究極の選択の範例だった。前者は「余剰」を一手に引き受け派閥を外的にコントロールする飽くまで「主」として振る舞い通す作法を、後者は「余剰」を撒き散らし派閥を内的に崩壊させるアナーキーな作法を教えてくれた。また私が出会った詩人はその「余剰」を性急に処理することを己に禁じていた。彼は「混乱は混乱のままに。耐えることだ」と語り、自らその「余剰」と化して行くとてつもなく困難な道を独りで歩いていた。「ただ獨り歩く、思考の／幽霊のような力」<sup>(6)</sup>。そんな詩人の仕事はいつのまにかひとつの鏡となって私がこだわってきた理論の言葉の隙間を映し出すようになった。私は私自身が一個の境界として揺れ動いていることに気づいた。そんな時に私は「余剰」を理論的に消化しつつある若者のテキストに出会った。そしてその同じ「余剰」を現実に見事に消化し尽くしている若者に出会った<sup>(7)</sup>。まずはそのテキストとの出会いから語りたい。

### 3 Jaques Derrida ou “tranche-fert”

それは東浩紀『存在論的、郵便的 ジャック・デリダについて』（1998）である。これはデリダについてこれ以上正確かつスリリングな批評はありえないだろうと思わせる極めて高い水準の論考である<sup>(8)</sup>。ただし、私はデリダが「デリダ」を演出しているように、「私」を演出したいと考えているので、東のデリダへの「拘り方」（精神分析的には「転移」）には疑問がある。その点

については後述する。ともあれ、デリダを解読してみせた東を解読してみよう。東が明記していることは著作に当たればいいし、それをここで整理してもあまり意味はない。東がデリダが明記しなかったことを解読したように、私たちは東が明記していないことを解読すべきである。まず東によるデリダ解読格子の輪郭を押さえておく。そのためには「目次」を一瞥してみるのがよい。

《第一章 幽霊につかれた哲学

第二章 二つの手紙，二つの脱構築

第三章 郵便，リズム，亡霊化

第四章 存在論的，郵便的

1 論理的

2 存在論的

3 精神分析的

4 郵便的

あとがき

索引》(p. 1)

この美しくさえある「目次」の構成，詩的あるいは文学的といっていい命名法はしかしよく考え抜かれた末のものだ。

第一に「まえがき」の不在。「あとがき」の存在との非対称性。第二に各章のタイトルである句の数の配置が一つ，二つ，三つときて，第四章は二つだがその節構成が四つとなっていることと，「四章」と「4つの節」にみられる「数4」あるいは「四つの配置」への拘り。第三に「索引」だが，これは目次だけからは分からないがその内容が「主要人名索引」のみで構成されており，「事項索引」は敢えて抹消されている。第四に「郵便的」，「存在論的」，「論理的」，「精神分析的」に見られる形容動詞をつくる接尾辞「的」の多用。

この四点はちょっと読み込んでみれば分かることだが実は著作内容の中核にも関わる四点だ。つまり彼（東）はテキストのコンスタティヴな内容をパフォーマティヴにも示しているということだ。その内容を極めて乱暴に整理してしまえば、近代以降のヨーロッパの思考の四類型あるいはその思考が辿る四つのステップということになる。そこでデリダが主役を演じている理由は、彼こそが第四の類型、ステップを最もラジカルに実践しているからということになる。その第四の思考というのが「郵便的」と形容されている思考、デリダの用語では「脱構築」という思考である。しかもそれは単なる思考に止まらず、テキスト実践と呼ばれる「書き方」のスタイルをも規制する<sup>(9)</sup>。

第四の「的」の多用はそのような「郵便的思考」の実践的応用である。「的」の付加によって語は他の語との連結への志向を帯びるためその記号的同一性が揺らぐ。しかし未だ他の語と連結させられない未決状態の「…的」なる語は連結の諸可能性を或る未知の空間として開いたままに止まり続ける。それは「確率的空間」、「様相的空間」と言ってもよい「郵便空間」である。この場合「的」は記号を「エクリチュール」化、「リズム」化、「幽霊」化、あるいは「亡霊化」するわけだ。

第一の「まえがき」の不在について。これは序文を後書きと同一視したヘーゲルの目的論の回避を意味する。本文の読みが到達すべき目的＝終わりを「まえがき」で与えることのテロスの忌避。もちろん「あとがき」が「本文」の「前」に読まれることは折り込み済みの手配である。したがって、「あとがき」は後述するように極めて意味深長な内容になっている。それはテキスト全体に流れる時間の輻輳性を暗示するに余りある。

第二の「四」への拘り。これは言うまでもなく一方では弁証法的な「三つの契機」の場そのものをずらす第四の契機の導入を意味する。他方では上述したように西洋近代思考の四パターンを指示する。

第三の「事項索引」の抹消について。これは事項索引によって強化されるテキストの「キーワード的読解」の回避を意味する。この点にはデリダが「郵

便的」戦略で抵抗し回避しようとした思考の範例が、「キーワード」すなわち固有名化された語の操作に基づいた「存在論的思考」すなわち「ハイデガー的思考」であることが正確に反映されている。

#### 4 “analyse interminable”

意味深長な「あとがき」には次のように記されている。

「本書はその副題に記されているように、ジャック・デリダという名の、きわめて難解かつ思弁的な哲学者を執拗に扱っている。そのことにはいま僕自身も驚いている。この本は『何故デリダは奇妙なテキストを書いたのか』という問いに貫かれているが、実はそれは、『何故僕はその奇妙なテキストに惹かれるのか』という問い、つまりデリダをかくも執拗に読んでいるこの私についての自己言及的な問いでもあった。そしてそれはまた言い換えれば、僕をかくも抽象的な思弁へと、いわゆる『哲学』へと駆り立てているものは何なのかという問いでもある。ひとは何故哲学をするのか。僕は途中から半ば本気で、その大きな問題について考え始めていた。そこから基礎的に始めなければ、このデリダ論の存在価値そのものが怪しくなると思われたからだ。しかしこの一連の試論を終えたいま、僕はまさにそれが畏だつたと感じている。僕はこの本のなかで、第三章の末尾と第四章の末尾、二度にわたりその自己言及的な畏に捉えられてしまった。結局のところ、それがこのデリダ論の躓きの原因である。誰でも同じだと思うが、二〇代半ばのこの五年間のあいだに、僕と僕をめぐる状況は根本的に変わってしまった。この本のいたるところがその個人的変化を映している。出版にあたっての修正はそれを隠すためにも行われたのだが、敏感な読者にはやはりそれは伝わるだろう。それはいささか嘆かわしいことだ。僕はこのような本をもう二度と書けないだろうが、また書くべきでもない。僕のつぎの哲学的な仕事は、もっと形式的で

もっと機械的な、あるいは幽霊的な、つまり『この私』とは徹底して無関係なものになるべきだと思う」(pp. 336—337 強調引用者)。

この舞台裏の告白とも言える「あとがき」が湛えるアンビヴァレントな調子(後悔と決断)が「示す」のは、哲学することの「危うさ」である。東が追跡し見事に追いつめたデリダ、その「奇妙なテキスト実践」という扉を開ける秘密の鍵は今や「郵便的脱構築」として理論的に定式化された。しかしその理論的含意と射程はアカデミックな仕事としての哲学の枠を切り崩して、現実の「僕」, 「この私」へ及んで来る。「思弁 speculation」とはつねに「鏡像 speculation」でもあるからだ。「この私」が行っていることが「この私」を映し出す。「自己言及的な畏」だと「僕」は気づくが、すでに遅い。「べき」の反復強迫は「幽霊 revenant」的な仕事の「再来 revenant」を予告する。

東はデリダという名の手強い被分析者あるいはデリダのテキスト群という奇妙な「徴候」に面した優秀な分析者として振る舞ってきた。彼の鋭い分析(理論的明確化)は「無意識」における「欲望」の「転移」, すなわちデリダという名に中心化している「欲望」を東が分有することで可能になっている。「本文」の終わりで東は記していた。

「[……]私のこの一連の試論は、たとえそのスタイルがいかにデリダ派から遠かったとしても、本質的にきわめて『デリダ派』的な、したがって保守的な欲望に支えられていたのである。デリダ派の問題を扱うには、私はデリダにあまりに深く転移している。というよりも正確には、そのような問題を立てること、『転移』について考えることそのものが、私がいかにデリダ派的であるかを雄弁に証拠立てている。[……]おそらくは、私はそろそろ散種の、すなわち tranche-fert (転移切断)の禁止を解除するべきなのだろう。それゆえ突然ながら、この仕事はもう打ち切れねばならない」(p. 335)。



東はデリダについて、とくにその理論的中核に位置する「転移」について論じること自体がすぐれて「転移」の問題であることに気づき、それはすでにデリダによって仕掛けられた罠であったことを知る。

東＝デリダが語るように、あらゆる集団の単一性は構成員の指導者への「転移 transfert」に支えられる。しかし転移は、つねにすでに「転移切断 tranche-fert」でもある。人はつねにある集団からほかの集団へと移転、あるいは切断移転するのであり、したがって「分派＝切片 tranche」はつねに分割される。この転移切断の問題、つまり転移から転移への移転可能性が「禁止」されるのは「政治的要請」ないしは「保守的欲望」である。終わりになき思弁は転移により開かれる。しかし転移はつねにすでに転移切断でもありうる、あるいはあらねばならない (pp. 330-331)。

ところで現実の集団（政治的党派であれ、アカデミックな解釈共同体であれ）がヒステリー化した場合の指導者の選択肢は二つしかない。一方はラカンがパリ・フロイト学派を解散したように、己自らを集団から「切断」すること。しかしこれは「主」の位置をより確実にするためにしか機能しない。それゆえ解散後ラカン派は迷走した (p. 332)。他方はデリダが現在も続行しているように転移を切断するのではなく、転移を「加速」すること。これは「主」としてより過激に振舞うことによって、集団の転移構造を内破させる戦略だ (pp. 333)。東が記すようにデリダはそれを企画している。したがって東がデリダから読み出した「郵便的脱構築」とは理論的であると同時にすぐれて実践的問題でもあったということだ。

さて「あとがき」に登場する「僕」は本文（報告）の「外部」に立っている。「あとがき」はアステリスク（\*）の打たれた空白を挟んで次のパラグラフで終わる。

「これは僕の最初の本である。したがって僕はこの本の成立について、無数の人々に、家族や友人たちから大学の教官にいたるまで、さまざまな人に

さまざまなものを負っている。しかし僕はここでは二人だけ、柄谷行人氏と浅田彰氏に特権的な謝辞を捧げたいと思う。彼らの存在がなければ、僕はそもそも、このような理論的な仕事が日本語で書かれ、そして読まれうるとは思わなかった」(p. 337)。

「理論的な仕事」はつねにすでに「実践的」でもあることを、そしてその実践がそこで評価される場もまた「郵便空間」にほかならないことを東は知っているはずだ。東の言う「僕と僕をめぐる状況の変化」とはその実践の空間における「転移」および「転移切断」の様子を想像させる。そこには「柄谷行人」や「浅田彰」といった名が刻まれた郵便網もある。だがそこでの転移の移転可能性こそが、東に問われている。そもそも「日本語」と指示された境界などは軽々と横断して「読まれて」、「批評されて」しまう「状況」があるからこそ、東の本は出版されたのではなかったか。「敏感な読者」はいたるところにいて、東の今後の転移切断の挙措を観察することだろう。私たちは東が「敏感な読者」と怖れる読者たちのいる場処で「僕」を主語とする新鮮な時間の流れを創り出し見せてくれることを願ってもいいだろう。

『存在論的、郵便的 ジャック・デリダについて』というテキストのなかには三つの時間が流れている。第一はコンスタティヴなテキスト空間をシリーズに運動する「私たち」の時間、第二は最終章最終節で突然登場するパフォーマンスでイロニカルな「私」の時間、そして第三は「あとがき」で登場するコンスタティヴかつパフォーマンスでポップな「僕」の時間。この二回の転移切断を促したのは「僕」のいる場処のはずだ。言い換えるならば、第一の時間は「分析的」(=「恋愛的」)、第二の時間は「超分析的」、そして第三の時間は「誘惑的=政治的」。第三の時間のなかで、東が私たちに魅了するリズムを刻み、誘惑的なステップを踏めるかどうか私たちは楽しみに待ちたい。

## 5 analytique, seducteur 分析的, 誘惑的

精神分析を参照せずとも、私たちは「分析」と「恋愛」が同型の関係構造を有することを知っている。相手への愛がなければ分析は進まないということ。そこでは意識的な主体は確固たる位置 (identity) を積極的に捨て、分析者すなわち誘惑される者として振舞わなければならない。彼 (彼女) は揺らぎながら、つまり相手との境界線を創出しながら進まねばならない。かくしてジャック・デリダを分析する東はジャック・デリダに恋をした乙女のようにだった。

そのような真実をすぐに見ぬいてしまった若者がいた。彼H君は東の理論的な仕事の実践的な含意の射程を「つまらない」、「面白くない」と評価した。分析関係が恋愛関係に他ならないならば、分析者は始めから不利な役を演じさせられる。被分析者に振り回されるわけだ。デリダを分析する東はデリダに振り回される。けだし振り回されることが分析=恋愛の醍醐味であるのだから、東はそれを充分味わったことになる。この「構造」そのものが「つまらない」、「面白くない」とH君は喝破したわけだ。彼にしてみれば、そして私もそうなのだが、デリダの位置 (positions) [複数形であることに注意] に立つことの方が俄然「面白い」はずだし、分析=恋愛を招き寄せる動きを創り出す方が知的にもより興奮的であるはずだ。それはたんに分析を醒めた眼で見る「超」の運動を単一に組織することや、あるいはその運動を複数に開いていくことによっては可能にならない(東はその段階にいる)。そこまではすべて「恋愛」の土俵だ。私たちはその土俵から一気に飛び降りてその土俵を必要なら利用する誘惑的=政治的な場処に身を移す。

その意味では詩人はまさしく誘惑者である。詩人はプラトンの時代から哲学者を誘惑し続けてきた。哲学の歴史は哲学者の詩人へのラブレター (love letters) の「集積 archives」として「読まれねばならない」のかもしれない。

「愛の手紙」は「文字への愛」とも読める。そして私はある詩人に魅了されていた。私は分析者になろうとする欲望に突き動かされていた。

## 6 philosophique, poétique, et politique 哲学的, 詩的, そして政治的

デリダは脱構築とは「哲学によっては形容されえず、名付けえない外部 [dehors] から出発して」(*Positions*, 1967, p. 14)考えることだと述べた。東は敷衍する。脱構築は、テキストに残された「外部」の痕跡を追跡する。その作業は具体的には、一方で言語の諸パラドクスの分析に、他方で詩的テキストの読解により導かれる。つまり脱構築は、逆説と詩を通して外部へ至る。「思考されざるもの」へと向かう逆説的な思考を、詩的言語へと近づきつつ組織していく (pp. 148–149)。

しかしなぜ「詩」なのか。先述したように私はある詩人とその仕事に出会い、魅了されていた。東がデリダに魅了されたように。その詩人は私が言語をめぐって触れていた鏡の裏箔のような場処に立っていた。その詩人とは吉増剛造である。

ジャック・デリダと吉増剛造が私のなかで交差する。哲学者と詩人。プラトンの末裔である哲学者が、プラトンによって「哲学=知」の世界から追放された詩人の末裔である詩人と私の中で出会う。一方は、プラトン以来の西欧形而上学の分厚い「伝統」を内側から食い破らんばかりの勢いで「哲学」の絶えざる再生を担い続ける哲学者、他方はその伝統に埋もれる地下水脈をプラトン以前にまでしなやかに遡行してみせる詩人。

プラトンによる哲学の世界からの「詩人の追放」劇は、実は「哲学」が己を「詩」からの境界付けの機能そのものとして見出した、その「始まり」を告げている。したがって、哲学の歴史は詩から己を分け隔てようとする欲望の歴史として読解することもできるはずだ。哲学の「言葉=文字 letters」は

詩人への「愛の手紙 love letters」であるということは、すなわち同時に「愛」によって永遠に隔てられた「空間 letter-space」=「余白 marges」を舞台に終わりなき「思弁 speculation」を開始するということでもあった。

哲学者デリダには詩人パウル・ツェランを論じた著作『シボレート』(*Schiboleth pour Paul Celan*, 1986)がある。そのなかでデリダは哲学と詩の関係を次のように明確に述べている。

「経験的なものと本質的なものあいだのこの区別とともに、或る境界、すなわちそれ自体としての哲学的なものの境界、哲学の識別の境界が攪乱される。哲学はそのとき詩の、さらには文学の周域に己を見出す、つまり再び己を見出すことになる。哲学がそこに再び己を見出すというのもこの境界の未決定状態こそは、おそらく哲学をして思考するべく最も強く挑発するものであるからだ。哲学はそこに再び己を見出すのであって、必ずしもそこで己を見失うわけではない。この境界がどこを通過しているかを知っているつもりでおり、哲学的経験と呼ばねばならぬところのものを欠いたまま、無垢ではないにもかかわらず恐る恐る、愚直なまでにこの境界にしがみついている人々が、その安穏な軽信のなかで思っているように、己を見失うのではないのだ。つまり哲学的経験とは、さまざまな境界に問いかけつつそれらを横断すること、哲学の領野の境界線に関して危険を冒すこと——そしてとりわけ、つねに哲学的であるのと同じくらい詩的、あるいは文学的な、言語というものの経験なのである」(pp. 138-139)

敷衍してみよう。哲学は「経験的なもの」に関わる諸科学が前提とする「本質的なもの」に関わることに於いてすでに「経験的/本質的」の区別が成り立たない領野に「己を見出す」のだが、そこは「詩」あるいは「文学」に関わる領野と重なっている。「哲学」に限らず、「詩」あるいは「文学」におい

ても「己」を識別するための「境界（線）」はつねにすでに事後的に見出されるに過ぎないのであって、それはそれにしがみつ়く人々が少なくない事実によって或る一定の機能を果たしているに過ぎない。問題なのは「言語という経験」がつねにそのような「境界」を踏み破る、いわば「終わりなき経験 *expérience interminable*」であることであり、その生々しい経験を潜り抜けることにおいて「哲学」、「詩」あるいは「文学」を区別することはほとんど意味はないということである。

しかしそもそも「終わりなき（「外部」の）経験」へと人を誘い出すものは何なのかという問いにデリダは答えない。そのような問いが禁じられた地平で彼は「哲学者」を演じる。たしかに「外部」はデリダが語るように「哲学」によっては名付けえないかもしれないが、私たちは「哲学」が必要としてきたものを必ずしも必要としているわけではない。東＝後期デリダはその「外部」の要請は古い哲学によるシステムの単一的なコントロールが生み出した「転倒」であることを暴くために「郵便的」戦略を練り上げた。ということはそもそも古い哲学に騙されてない者にとってはそのような迂回は必要ないということである。この経緯はコミュニケーションの問題へと送り返される。

冒頭で述べたように、ここ数年私はその問題に関わり続けてきた。デリダの言う「言語というものの経験」とは私たちの用語では「コミュニケーションという経験」に相当する。そのような経験が「論じるべき問題」となるのは、それがつねに「失敗」に曝されていると感じているからにはほかならない。失敗すなわち何か不足がある、それを埋めなければならない、というわけだ。しかしどこに「成功＝充足」の基準があるというのか。そもそも失敗＝不足などありえないのだとしたらどうだろう。「すべては上手く行っている」のだとしたら？不足を埋めようとして「余分」を抱え込んでしまう構造があるだけだとしたら？あらゆるシステムはそのような「構造」を持つのだとしたら？私たちはそのような「否定的な構造」から抜け出したいと考えている。これは、東が自分のジャック・デリダ論の「躓き」として言及した「構造的な問題」

(p. 334)にも通じている。そのような否定的な構造からシステムを「肯定的な構造」へ変容させたいと考える私たちは「分析的」=「恋愛的」であることから、「誘惑的」=「政治的」になることを目指さざるをえない。そして自らを「成功」の基準として示して行くこと。東=デリダできえ欠いていると私たちが考えるこのラジカルな「政治性」を実は詩人は分かっている。彼(吉増剛造)はそれを逆説的に行使してさえいる。だから私は魅了されたが、しかし現在私は逆説的にではなく、素直かつしたたかにそれを行使したいと思っている。詩人のテキスト(poésie)の余白に“politique(政治的)”と落書きしながら。

こうして私たちは「政治的 politique」な境域に立つ。私たちはすでに「幽霊」を必要としないがゆえに欲しない。もちろん「幽霊 revenant」は東=デリダが語るように「再来 revenir」する。しかしそれは再来を欲するひとの処にのみ再来するのであり、私たちは今や明確に欲しない。私たちが目指すべきは、文脈を限って言えば、例えばデリダが東を誘惑したようにデリダを誘惑してみせることである。そうでなければ、デリダを綺麗に無視してみせること。それができなければ、さっさと哲学者の看板は降ろすのが筋というものだろう。ときにシリアスに、ときにイロニカルに、そして肝心なときにはポップなギャグで時空をユーモラスに歪めて遊ぶ。この不謹慎な理想(これは私が冒頭で「抵抗の方法」と呼んだものの雛型に相当する)が当たり前の現実になるのはいつだろうか。

#### notes

(1) *ENTRETIENS AVEC LE MONDE 1. PHILOSOPHIES*, Paris, 1984

(2) 1985年3月, 北海道大学における退職記念講演。花田圭介(1922-1996)の略歴は以下の通り。

- 1922 東京に生まれる  
1942 第一高等学校入学  
1942 東京帝国大学入学  
1943 臨時徴収現役兵として船舶部隊に入隊  
1945 広島にて被爆  
1948 東京大学文学部哲学科卒業  
1948 東京大学文学部大学院入学  
1950 東京大学文学部大学院退学  
1950 北海道大学文学部講師  
1953 同助教授  
1966 同教授  
1967-68 ローマ大学客員教授  
1967 哲学博士 (ツール大学付置ルネサンス高等研究所)  
1968-ルネサンス高等研究所名誉研究員  
1969 花崎皋平氏と解放心学運動開始  
1975 サロン・ド・フローラ開始  
1979-国際ヘーゲル協会運営委員  
1980-82 北海道大学文学部長  
1984 フランス C.N.R.S. 客員研究員  
1984-《ARCHIVES INTERNATIONALE D'HISTOIRE DES IDÉES》編集委員  
1985 北海道大学文学部定年退職  
1985-フランス C.N.R.S. 研究員  
1996 東京にて死去

[本略歴は『思索の迷路 花田圭介先生退職記念論集』(1986)から一部加筆の上転載。]

(3)「最低の条件と課題 (哲学の新しい任務)」『思想』359号, 1954, pp. 19-28

(4)以下に読まれるのは当初「現代哲学の可能性の中心」というタイトルで本文に第二節として組み込まれる予定だった文章である。しかしながらこの文章は本文全体のト一



ンを統一するため, 文体的齟齬の観点から注に落とさざるを得なかった。内容的には本文と連結している。多少長いがご容赦願いたい。

《私が比較的多く接してきた英米系の分析哲学の伝統的マナーでは, 一般に言明におけるメタレヴェルのオブジェクトレヴェルへの介入, およびそのことによる論理的混乱を回避するために, ラッセルによるロジカル・タイピング (論理階型) の要請, つまりオブジェクト/メタのレヴェル区別を遵守するのが常識になっている。また, オースティンによって創始された言語行為論で導入されたコンスタティヴ/パフォーマティヴの区別遵守も同一線上の要請としてある。したがって私に限らず, 職業哲学研究者としてはある特定のテキスト系列を対象 (オブジェクト) として, その精密な読解と注釈を求められる。いわゆるコンスタティヴな「報告」である。しかしながらオブジェクト/メタ, そしてコンスタティヴ/パフォーマティヴの区別は厳密には維持されないことがすでに理論的に知られている。実際にも事実確認的な報告そのものが, 対象 (オブジェクト) に関する報告 (意識) を「超えて」(メタ) パフォーマティヴ (無意識的) に機能してしまうことを封じることはできない。むしろそこにこそ, 生産的な「誤読」の可能性が宿るとも言える。もちろんこの可能性自体をさらに, 社会的コミュニケーション空間の理論化や無意識における欲望の転移メカニズムの理論化の対象 (オブジェクト) に据えることを禁じることもできない。

さてここで現代哲学の理論展開を簡単に振り返っておきたい。先ず英米系の分析哲学と大陸系の存在論哲学という二つの並行する〈哲学的プログラム〉があると押さえておくと見通しがよくなるだろう。前者の理論的フォーマットはウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』(1922)において定式化され, 後者のそれはハイデガーの『存在と時間』(1927)において定式化された。前者では世界との論理的写像関係にある命題群=言語/その全体を支える「論理形式」の二分法, 後者では存在者を扱う諸科学/その全体を支える存在了解の二分法である。英米系の分析哲学と大陸系の存在論哲学は, 異なった語彙を用いながらも, 共通の理論的フォーマットを採用していた。要するにそれは「思考可能なもの」と「思考不可能なもの」の峻別である。そして, 「哲学」が携わる領域を前者に限定するのが英米系哲学で, 後者についての思考こそが哲学で

あると規定するのが大陸系哲学である。

英米系の分析哲学では、「哲学」すなわち「分析」は、ある絶対的で不可侵なレールの上を移動する。それが上述の「論理形式」である。論理形式とは思考を規定する形式であり、それ自体は思考の対象にはならない。したがって、論理形式そのものがなぜ「存在する」のかと問うことは「形而上学」として斥けられる。実際には、「存在」は「量化」され、あくまで「意味論」の枠内で処理される。「存在論的コミットメント」は禁じられるのである。他方、大陸系の存在論哲学ではハイデガーが「存在への問い」として、存在カテゴリーという思考の形式（論理形式）を「人間=実存」への「問いかけ」を通じて「存在論化」する「道」を切り開いた。論理形式はメタレベルのまま「思考」されうる方法が整備されていた。ハイデガーの立場から見れば、論理形式（「存在」）を不可侵の領域として祭り上げる分析哲学の思考こそ「形而上学システム」だということになる。しかし、ゲーデルの「不完全性定理」（1931）によって、「体系」の「不完全性」が指摘されて以降、分析哲学者といえども前期ウィトゲンシュタイン的な「沈黙」を守ることはできなくなった。つまり、「存在論」への〈穴〉が発見されてしまったのである。体系の〈形式化〉は必ずその体系内部では処理できない要素の発見へと導かれる。体系内部での「語り」が体系自身の論理によっては制御不能になる〈点〉、すなわち〈形式化の限界〉を通じて、体系外部のあるいは体系以前の「思考不可能なもの」を捉えようとする〈思考〉が開始されざるを得なくなっていた。

その後分析哲学の前線は「規則」や「固有名」といった経験的な知の領域を超えた「超越論的」な対象すなわち「思考不可能なもの」の〈思考〉へと踏みこんでいく。その動向を牽引したのはソール・A・クリプキだった。彼は『名指しと必然性』（1980）において後に「可能世界論」と呼ばれることになる「固有名」の問題圏を、『ウィトゲンシュタインのパラドックス』（1982）において後に「他者問題」と呼ばれることになる「規則」の問題圏を提示した。両者はともに画期的な「コミュニケーション論」としての射程を持つものだった。とりわけ後者に関わる「言語ゲーム」の着想に私は関心を持ち、一時期、いわゆる後期ウィトゲンシュタインの仕事を検討していた。ウィトゲンシュタインのいわゆる「後期」の仕事は、「思考不可能なもの」を捉えようとする

る〈思考〉に日常言語から肉薄しようとした貴重な記録として位置付けることができる。例えば、『哲学探求』(1953)は〈形式化の限界〉の例を様々に実演(パフォーマンス)してみせたコレクションとして見ることができる。その意味では有名になりすぎた「言語ゲーム」という名称は誤解に導きやすい。実際にウィトゲンシュタイン自身、「言語ゲーム」という名称を述語的に使っているだけである。ところが、研究者のなかには、「言語ゲーム」を物象化し、複数の経験的言語ゲームという存在者を、その全体を支える「超越論的言語ゲーム」に「基礎づけ」ようとする者もいる。しかし、「言語ゲーム」はすでに非経験的な領域を名指しており、そのこと自体すでに「超越論的思考」の開始を告げている。したがって、そこから「言語ゲーム」は「単数」か「複数」か、という重大な問いが引き出されるはずである。もはやウィトゲンシュタインを「読む」ことの「可能性の中心」はそこにしかない。ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」はハイデガーの「存在」に相当する。ハイデガーは「存在論」を展開したが、ウィトゲンシュタインは「言語ゲーム論」を展開しなかった。この「差異」に現代哲学の「可能性の中心」は宿っている。[この点については別の機会に論じる予定である]。

他方ハイデガー以降の大陸哲学の動向で見逃せなかったのは、いわゆるパリ・フロイト派を主導したジャック・ラカンによる精神分析が絡む哲学的動向である。ラカン派精神分析は一方ではもちろんフロイトを継承しつつ、他方ではハイデガーの存在論哲学、その解釈学的一実存論的分析、さらにはフレーゲとゲーデルの数学基礎論上の成果をも見事に消化しながら巧みに利用していた。1960年代以降のいわゆる「フランス現代思想」の論客たちはおしなべてみなラカンとの理論的対決のなかからそれぞれの〈思考〉を展開してきたと言える。「精神分析」というと、その「臨床的 clinical」側面のイメージの強さから、「哲学」とは縁遠いと思われがちだが、実際にはその「臨床」をも含めて、精神分析は私たちの「世界認識の構造」および「コミュニケーション」に関わる仕事であり、それは優れて「哲学的な」営みでもあることを知っておいたほうがいい。精神分析理論で使用されるターミノロジーの特殊性の印象についても、それは多分に「邦訳」による、他分野のターミノロジーとの乖離の印象に起因してい

と思われる。例えば、フロイトの名とともに有名な「無意識 Unbewußtsein」という語は「意識 Bewußtsein」から造られ、後者は「知る wußt <wissen」から造られている。そして「知 Wissenschaft」とは「学問=科学 Wissenschaft」に他ならない。事情は英語でも変わらない [unconsciousness <consciousness <scious=science <scientia]。つまり、意識的な知としての狭義の学問=科学によっては捉え切れない領域が「無意識」と名指されたわけである。先述したように、大陸系の哲学プログラムは正にそのような領域に関わるのだった。ちなみに、フロイトはすでに1925年の段階で「無意識」は「他者の媒介」によってのみ露わになることを幾度も強調すると同時に哲学や心理学はそれを欠くために「無意識」を認められない旨を記していた。そもそも大陸系哲学が精神分析との深い関連を有しているのは、現象学が抱える最大の理論的アポリアとしての「他者問題」が前景化し、正に「他者」としての病者に関わる「臨床的な」技術=知としての精神分析が提示した「無意識」の理論が、哲学にとって理論展開のブレイク・スルーのための鍵になったからである。そのような共通の基盤の故に、例えば、フーコー、ドゥルーズ、デリダらはラカン派精神分析との理論的闘争、思想的対決を「哲学的に」強いられたわけである。その成果を私たちは今日彼らの諸著作として読むことができる。彼らに共通の標的は、ラカンによって「ハイデガー化されたフロイト」であり、それを「脱ハイデガー化」し、フロイトの「可能性の中心」を救い出すことが目指された。その理論闘争を最もラジカルに戦略的に行ってきたのがジャック・デリダである}。

(5)詩人吉増剛造との出会いについては拙稿「吉増剛造論の余白に」(『札幌大学総合論叢 第7号(1999.3)』所収)参照。

(6)1997年11月25日、札幌大学「北方文化フォーラム」における詩人吉増剛造氏の講演の題名。

(7)京都精華大学から札幌大学に国内留学(1998.4-1999.3)していた学生の平岡拓夫君。彼との出会いは新鮮な驚きだった。その驚きとともに私はそれまで私が「思想」と「教育」だと考えていたものが完全に過去のものになったことを認めたのである。その一端は彼が企画制作したフリー・ペーパー『ポップ・マニア POP MANIA』(1998, No.

00, No. 01)に窺い知ることができる。

(8)本書はデリダの現在までの「闘い」を精密に追跡し、見事に整理したきわめて優れた仕事である。それは狭義の「デリダ論」を遥かに超えた視野と射程を兼ね備え、現代哲学の入り組んだ最前線をも明確に描いてみせた野心作である。逆に言えば、後者を正確に辿らなければ、「デリダ」を論ずることもできない、ということの本書は余すところなく示しているということだ。東が描いた現代哲学の最前線の見取り図は、哲学研究が今後踏み込んでいかなければならないスポットを驚くべき正確さでマッピングしている。

[追記] 脱稿後、私と同世代の社会学者宮台真司と東浩紀の対談「考えなくて、大丈夫!？」(『リトルモア』VOL. 7, 1999, pp. 14-23)を読んだ。それは「若い世代が、あまりにも考える能力を放棄しており、知的なものへの関心を自ら閉ざしている」(p. 16)という最近の状況に関する両者の共通認識をベースにして、そのような状況の只中にいる若い世代の一人である東による『存在論的、郵便的』が持つ現代的意義の広がりや宮台が東本人を通してチェックするという按配のものである。本稿の最深の意図にリンクする論点、すなわち「誘惑的」、「挑発的」あるいは「政治的」なポジショニングに対する両者、とくに東のスタンスが読み取れる興味深い対談記録である。両者の共通認識に対して私は根本的な異論を展開する用意があるが、それは別の機会に形にしたい。

(9)因みに東は「脱構築」を次のよう明快に整理している。

《私たちはこれまで「脱構築」を、複数の異なった方法で区別し名付けてきた。まず第一に私たちは、「二つの脱構築」を、wissen (知) の外部、Da (現前) から排除されたものをめぐる二つの考え方として整理した。第二章から繰り返してきたように、論理的-存在論的脱構築はそれを単数で観念的に、そして郵便的脱構築はそれを複数で物質的に捉える(内容的差異)。さらに第二に私たちは、本章の第二節において論理的脱構築と存在論的脱構築を区別した(内容的かつスタイル的差異)。前者の脱構築は、オブジェクト/メタの媒介回路の構成により Da にあいた穴を発見する。表象作用の円錐構造を解体するその作業は、いまだ「科学的」な語彙とスタイルで実行されてい

る（その具体例がゲーデル）。他方後者の脱構築は、前者の作業を受けて、Da の穴を縫合してシステム全体を再び安定化させる運動、オブジェクト／メタの媒介回路を循環し続ける超越論的シニフィアンについての探究を展開する。クラインの壺構造の閉鎖性について思考するその作業は、もはや科学的な語彙とスタイルでは実行されない。そこでは哲学素が隠語化＝固有名化される。そして第三に私たちは、本節で論理的脱構築と郵便的脱構築のスタイル的差異について考察した。それはテキスト上の転移関係の有無により規定される。以上三つの脱構築の関係を図示すればつぎのようになるだろう[表]。存在論的脱構築と郵便的脱構築はともに、wissen の彼方を言語化しようと欲する。ただし前者はそこで哲学素の固有名化を、後者はその転移化を利用する》(p. 295)

なお第三節で私が「思考の四類型」ないしは「四つのステップ」と呼んだのは上記の「三つの脱構築」に脱構築以前の「形而上学的思考」を加えてである。下に転載した[表]中(a)および(b)は東が作成した原版では正確を期してブランク（空白）のまま放置されている。正確さを犠牲にして分かりやすさを最優先すれば、(a)には philosophieren(哲学する)、(b)には metaphysik(形而上学)が置かれうるだろう。ただし、正確には両者とも左欄にオーバーラップする。

スタイル 指し示されるもの	Wissenschaft	(a)
wissen	表象的言語 オブジェクト／メタの区別	(b)
wissen の 彼方	論理的脱構築 オブジェクト／メタの区別の 自壊	via negativa 存在論的脱構築 哲学素の固有名化 「不可能なもの」についての 単数的表現  ? 郵便的脱構築 哲学素の転移化 「不可能なもの」についての 複数的表現